

# 対面コミュニケーション研究の問題と展望

— “符号のやりとり” と “場の共有” をめぐって —

伊 藤 哲 司

はじめに

我々は、自分以外の人間と何らかのコミュニケーションをとりながら、毎日の生活を送っている。「今日は丸一日、誰とも会うことなく、家に閉じ込もっていた」などという場合があってもおかしくはないけれども、何日にもわたって誰ともコミュニケーションをとることがないという状況は、多くの人にとっては考えにくい。「人間は社会的な動物である」と言われる所以は、言うまでもないことだが、そこにある。コミュニケーションは人間の基本的な営みのひとつであると言っても過言ではない。

ここでいうコミュニケーションとは、意図的であるかどうかにかかわらず何らかのメッセージを2人以上の者が相互に伝達することを指すと同時に、そのことが可能な場 — 必ずしも物理的に近接した場でなくてもよい — を互いが占めていることを指す（したがって、いわゆるマス＝コミュニケーションなどは、ここでは問題にしない）。コミュニケーションには対面で行うものだけでなく、いろいろな形態のものがある。例えば、手紙はもちろん電報や電話もすでにそれなりの歴史を持つに至っているし、また同じ電話でも映像をも利用するテレビ電話の発想はけっして新しいものではない。そして最近では、パソコン通信というこれまでに我々が経験したことのない性質を備えたコミュニケーションのメディアが、ここ10年ほどの間に急速に発達してきた。その通信網は今や全世界に広がっている。そこに繰り広げられるコミュニケーションの様相は一種独特であり、すでに心理学者が研究対象として注目をし始めている（例えば、川上・川浦・池田・古川、1993）。

これらはすべて、“文明の利器”であるメディアを介してのコミュニケーションである。こういったメディアのおかげで、例えば、離れた場所にいながら会

議を開催したりすることなどができるようになった。技術的にはすでに、世界中のどこにいる人とでも、リアルタイムで会話を交わすことができるようになっている。一時代前には考えも及ばなかったことである。

にもかかわらず、例えば国と国との重要な問題が話し合われるような場合には、それぞれの国を代表する人がそれぞれの自国にとどまったままでコミュニケーションが図られることは、ほとんどない。今後さらにメディアが発達しようと、このことは変わらないだろう。これは、個人と個人が深く知り合い緊密なコミュニケーションを交わすためには、お互いが面と向かい合うことが結局は必要であるということを示している。我々の身近な例で考えられることとして、自分の家族が遠い街にいる場合はどうだろう。どれだけ手紙を書いたり電話をかけることが可能であろうと、それで「会いたい」と思う気持ちを満足させることはできないのが、常人の感覚というものであろう。

これらの例から推測できるように、コミュニケーションのメディアがいかに発達しようと、それでは媒介できないものがありそうである。最近では、バーチャル＝リアリティ（仮想現実）の技術を利用して、遠隔地にいながらあたかも同じ場にいるようなかんじでコミュニケーションを交わすことができるようなメディアが、研究・開発されつつあると聞く。しかし、相手と触れ合ったり相手の体臭が嗅ぎとれたりするところまでいかない限り——それはほとんど実現不可能だと思われるが——メディアを介したコミュニケーションは対面コミュニケーションと同等にはなりえないだろう。面と向かい合っているようでありながら相手に触れることができないのは、“面と向かい合っている”ということが妙に強調された不自然なものになる可能性がある。その不自然さは、対面コミュニケーションのリアリティを乗り越えた超リアリティ的なものなのではないだろうか。それに対して我々が適応的でいられるかどうかには、懐疑的にならずにはいられない。“本物”に似せることが、必ずしも我々にとって快適なものになるとは限らないのである。むしろテレビ電話程度にとどめておく方が、快適なコミュニケーションのメディアになるのかもしれない。

対面でのコミュニケーションが個人間のコミュニケーションの基本であるということは自明である。上述のような問題を考える上でも、対面コミュニケーションがどのようなもので、そこで何が起こっているかを把握し理解しておく必要がある。すべてのコミュニケーション研究は、対面コミュニケーションがその基本として想定されていなければならない。

これまでも対面コミュニケーションの研究は数多くなされてきたが、本論では、これまでのその手の研究の多くがとっているものとは少々異なる枠組みを提示してみたい。結論的なことを少し先取りして言えば、それはコミュニケーションを、一種の“符号のやりとり”とみなすことに留まらず、2人以上の者の間に形成される“場の共有”としても捉えるものである。これまでの研究は前者だけを考慮していたものが多く（北村，1983）、とくに人間の脳の働きを一種の情報処理過程と見なす認知的アプローチの立場にその傾向が顕著である。詳細には追って述べるが、本論で提示する枠組みは、対面コミュニケーションの様相をより実状にそってダイナミックに描き出すためのものである。その枠組みを採用することは、対面コミュニケーションそのものを考えようとする基礎的な研究にとっただけでなく、何らかのメディアを介したコミュニケーションや臨床場面でのコミュニケーションの理解などの応用的な研究にとっても有益であると考ええる。

#### “バーバル行動” v s. “ノンバーバル行動” という捉え方でいいのか？

対面コミュニケーション研究においては、“バーバル行動”に相對するものとしての“ノンバーバル行動”がしばしば注目される。心理学における“ノンバーバル行動”の研究は1960年代になってようやく本格的に始まったと言われるが（Davis, 1979）、それに対する研究者の関心は、ダーウィンの頃まで遡ることができる（Darwin, 1872）。“ノンバーバル行動”は、現在では、社会・発達・臨床・動物行動・比較文化といった心理学の各領域だけでなく、人類学や動物学などにおいても関心が高い研究対象である。

“ノンバーバル行動”に対して何ゆえこのように関心が高いのかを考えてみると、いくつかの点をその理由として挙げるができる。まずは、“ノンバーバル行動”が“バーバル行動”に比べてしばしば雄弁であると考えられている点である。相手の話をいくら聞くよりも、相手の表情を一瞥する方が、相手の気持ちを知るのに有効であることは、確かに多い。また、“ノンバーバル行動”の意味しているものが“バーバル行動”のそれとは矛盾することがあり、そのさい我々は、しばしば“ノンバーバル行動”の方を信用すると言われている点も挙げるができる。例えば、お母さんが子どもに対して恐い顔をしながら低調な声で「お母さんは怒っていないけどね……」と言えば、子どもはお母さんの怒りを敏感に察知するにちがいない。さらには、“ノンバーバル行動”は

“バーバル行動”と同じように、文化によって明確な差異が認められるというのも、興味をひく点だろう。またさらに別の点を考えてみると、“バーバル行動”を持たない乳児や動物（こういう言い方には、動物も言葉を持っているとする立場からは異論があろうが）の行動に注目する上では、“ノンバーバル行動”に焦点を当てることが必然であるということもある。

筆者自身もこういった点から“ノンバーバル行動”に興味を抱き、卒業研究（伊藤，1987）以来最近まで、一貫して“ノンバーバル行動”を分析対象としてきた。これまでの拙論のタイトルは、「対人場面におけるノンバーバル行動について — 実験的観察法を用いてのアプローチ —」（伊藤，1989），「ノンバーバル行動の基本的な表出次元の検討」（伊藤，1991 a），「対人相互作用場面におけるユニットのノンバーバル行動の特性」（伊藤，1991 b）などであり，“ノンバーバル行動”という言葉がキーワードになっていたことを理解して頂けるだろう。しかしながらこれまでの研究を通して，“ノンバーバル行動”という捉え方にどこまで妥当性があるのか疑問を抱くようになり、現在は単に“行動”と呼ぶことにしている（Ito, 準備中）。それは以下に述べるような理由による。

“ノンバーバル行動”は、「すべての非音声的行動、および言語的でないすべての音声行動」（Bull, 1983）などと定義される。つまり，“バーバル行動”に相対するものとして“ノンバーバル行動”が想定されている。しかし「非音声的行動」である手話は“ノンバーバル行動”なのだろうか？ 相手の言ったことを承諾する意味で「はい」や「うん」と言う代わりに大きくうなずいたりニコリと笑ったりすることも“ノンバーバル行動”なのだろうか？ 説明したい物の形を手で示す動作も“ノンバーバル行動”なのだろうか？ 話に詰まったときに発する「あー……、えー……」などという声は“バーバル行動”なのだろうか“ノンバーバル行動”なのだろうか？ 「でもー……、そのー……、それは……こういうことにしましょう」と言った場合は、どこまでが“ノンバーバル行動”で、どこからが“バーバル行動”なのだろうか？

つまり，“バーバル行動”と“ノンバーバル行動”の境界は、上述の例からだけでもわかるように、非常に定めにくいものである。いや、両者の境界は定められないと言った方が正しい。しばしば，“バーバル行動”は「明確な一義的意味を持ったもの」であり，“ノンバーバル行動”は「背景的な広い意味を持ったもの」であるなどと漠然と考えられてもいるようであるが、それも

適当な考えであるとは思われない。通常“バーバル行動”と思われている言葉も、しばしば曖昧な意味や二重の意味や背景の意味を担うことがあり、一方“ノンバーバル行動”と思われている身振り・手振りも、手話の例を持ち出すまでもなく、一義的な意味を持つことがありうる。

そこで本論では、“バーバル行動”“ノンバーバル行動”という二分法を排することをまず提起したい。「ノンバーバル行動はバーバル行動よりも〇〇倍の情報を伝達している」などという比較（例えば、Knapp, 1972）も、したがって意味を成さない。そのような二分法は有益でないばかりか、行動の本質を見誤らせることにつながりかねないことは、以上までの論考から明らかである。

しかしながら、言語的あるいは非言語的という性質は、様々なチャンネルの行動それぞれに見い出すことができる。後に詳しく述べるように、言語的とは明示的・意識的・中心的であることであり、“符号のやりとり”がその特徴である。一方、非言語的とは暗示的・無意識的・周辺的であることであり、“場の共有”がその特徴である。そしてこの言語的-非言語的という軸上に、様々な行動のチャンネルを位置づけることができると考えられる（図3参照）。もちろん必ずしも「言葉＝言語的」でも「身振り・手振り＝非言語的」でもない。言葉は概して言語的であるが、非言語的な性質を帯びることもある。一方、身振り・手振りは、言語的であったり非言語的であったりする。ここで言う言語的・非言語的とは、あくまで行動の性質を示している。

### “場の共有”への注目

言語的-非言語的の軸について詳しく述べる前に、次の問題を考えておきたい。これまでの多くのコミュニケーション研究では、メッセージの発信者 (encoder) と受信者 (decoder), それにメッセージの意味内容である符号 (code) が想定され、発信者が符号化 (encode) した符号を受信者が解読する (decode) するという枠組みがとられている。つまりコミュニケーションを、“符号のやりとり”という点から捉えている。例えば、「……、まず二人の人間を前提とすることになる。今それをAとBとする。(中略) Aのノンバーバル行動によって、BがAのことについて何らかの情報を得たり (対人認知), またAのノンバーバル行動によって、Bが影響をうける。これらのことが、二者間におけるノンバーバル行動のテーマである」(春木, 1993) とか、「例えば身振り (語) やその洗練された手話を考えると、伝えられるべき内容が情報の送り手によつ

て同時並列的に表出されていることが想起される。またその情報の送り手にとっても複数の情報が同時に情報処理の対象となっていることが理解される」(齋藤, 1992) などとするのが、その典型と言えよう。同時に表出される複数の符号が考慮されていても、「符号のやりとり」という捉え方の本質は変わらない。前述のとおり、認知的なアプローチ(例えば、上の2つの例の后者)では、コンピュータのアナロジーで人間を考えがちであるから、いきおいこの捉え方をするようになる。

“ノンバーバル行動”の研究でしばしば引用される Ekman & Friesen (1967) による“ノンバーバル行動”の分類、すなわち表象(emblem)・例示的動作(illustrator)・情動表出(affect display)・規制的動作(regulator)・自己適応動作(adaptor)という分類がある。このような分類がまったく無益であるとは思われない。また、自己適応動作 — 例えば、自分の身体に触れることで不安を低減させるという行動 — というカテゴリーの分類をしていることからわかるように、自己に対する機能も考慮されていることなどは興味深い。しかしながら、それぞれの行動がそれぞれ何らかの意味内容(=符号)を担っており、その行動をしている発信者からその人に相対している受信者にそれが伝わるということが、暗黙のうちに想定されている。ゆえに、上述の“発信者—符号—受信者”という枠組みを前提としたものであることがわかる。

比較文化的な研究(例えば、Brosnahan, 1988; 金山, 1983; 熊谷, 1992)でも、この枠組みが典型的に採用されている。例えば、Vサインは世界の多くの地域で「勝利」などのポジティブな意味を表わすが、イギリスではVサインをしている手の甲を相手に向けると侮辱表現になる、といった具合である。このような情報は、異文化と接する機会が多くなった現在においては、有益な場合があるのは確かである。しかしながら、このような見方がコミュニケーションの文脈と切り放されて考えられてしまうと、一般雑誌にしばしば取り上げられるような読心術的な情報(例えば「相手が腕を組んだら、それはあなたへの拒否的な気持ちの表われである」など)へと進展してしまうようである。ついでに言えば、そのようなものがしばしば心理学的なものとして語られ、心理学に対する人々の大きな誤解 — 心理学が“読心術的なもの”として捉えられ、例えば「心理学を専攻しています」と言うとき「では私の心がわかりますか」という反応が返ってきたりする — に結びついているように感じる。

北村(1983)は、「発信者—符号—受信者」という枠組みを「あまりにも言

語中心的]な「機械論的伝達モデル」であるとして、そのような捉え方を批判している。“ノンバーバル行動”と同義の呼称として“ボディ・ランゲージ”が使われることがあり、この呼称が言語中心的な行動の捉え方を明示していると言えよう。北村は「対面的な相互作用におけるコミュニケーションの本質的な特徴のいくつかは、上述の機械論的なモデルでは理解できない」と述べ、「共有関係のモデル」と称するものを提唱している。それは、行動と行動の関連性に着目するもので、例えば自分の発話に相手があらずいた場合に、あらずきそのものに意味があると考えerのではなく、自分の発話に相手があらずいたということ——あるルールに則った関連性のある行動の生起というデキゴトの発生——に意味があると考えerものである。そのように行動を捉えるのは、“発信者—符号—受信者”という枠組みでの“符号のやりとり”には還元できない“場の共有”というものを考えなければならぬからである。

入谷(1968)は、コミュニケーションにおいて認められる場の働きには2つのものがあることを指摘し、それらは「記号の場」(文脈の中にあつて、それから比較的独立に働きうる言葉という記号のシステムそのものがつくり出す場)と「文脈の場」(コミュニケーション行動そのものから生ずる文脈によってつくられる場)であると述べている。そしてその両者の場は、相互に依存・関係し合っているという。「記号の場」というのは、本論でいう“発信者—符号—受信者”という枠組みに対応している。そして「文脈の場」というものを入谷は言葉の相互連関から生み出されるものと考えているようであるが、これを言葉に限らず行動間の関連性から生まれてくると拡大して考えることができるだろう。

行動には確かに入谷の言う「記号の場」という側面があるから、本論はそれを否定しようとするものではない。しかし上述のとおり、コミュニケーションには“符号のやりとり”に還元できない“場の共有”という側面がある。“符号のやりとり”と“場の共有”の両方を認める必要があるのである。人と人とのコミュニケーションに対して人と機械とのコミュニケーションというものを考えたときに、決定的に異なっているのは、この“場の共有”というものが無いことである。コンピュータに“感情”を持たせる試みをして、この差異に何ら変化はない。人と機械とのコミュニケーションを研究する場合には、“場の共有”の欠如ということに気づいていなければ、不毛な成果しか得られないだろう。

“場の共有”という枠組みに言及しているのが、上述からわかるように日本人であったというのは、偶然ではないように思われる。日本文化では、しばしば「間」というものが重視されていることは指摘するまでもない。「世間（世の間）」や「人間（人の間）」などという称し方があるのも、このことと関係がある。日本人には、コトとコトの間に何らかの関連性を認め、それをデキゴトとして捉える発想があるように思われる。コミュニケーション研究では、例えば野村（1992）も、「むしろ、複数の人間がいる場では、無関心、無視、知らないふり、などふくめて（それらは記号学的には「ゼロ記号」だろう）、なんらかのはたらきかけ、相互影響がおこる、その相互作用の場から身体的コミュニケーションの研究は出発すべきだろう」と述べており、筆者もそれに賛同する。

#### 「シンクロニー」「エントレインメント」「リズム」

コミュニケーションにおける“場の共有”を考える際に、具体的に注目しなければならないのこのひとつが行動間の関連性である。行動間の関連性に着目した行動研究のキーワードになっているのが「シンクロニー」「エントレインメント」「リズム」といった用語である。「シンクロニー」あるいは「エントレインメント」は、2者以上の行動が時間的な関連性を持ち、同時的もしくは継時的に生起することを指す。「リズム」とは、個人の持っている行動のテンポやパターンのことであり、それが個人間でかみ合ったりかみ合わなかったりすることが問題となる。

例えば前出の野村は別の著書（野村，1983）で、シンクロニー（野村は「感応的同調」と呼んでいる）が日本語で言う「なじむ」という言葉に通じるものであることを指摘している。野村によれば「なじむ」とは非意志的な経験であり、その積み重ねがシンクロニーであるという。その経験とは、多田（1978）によれば、典型的には肌においておこる接触感覚による非分節的経験である。例えば「似たもの夫婦」という言い方が日本語にはあるが、これはシンクロニーの長年にわたる繰り返しの結果に他ならないという。我々が接する人の中には、どうしても馬が合わないという相手もいる。話が合わない、趣味が違う、考え方が異なるなど、いろいろな原因があろうが、そんな人と接するときには、シンクロニーもうまくいっていないのであろう。あるいは行動のリズムがあまりに違いすぎて、相手とじっくりいかないということもあるかもしれない。



生まれて間もない新生児が、例えば母親の舌出しの行動を模倣することが知られている（野村，1980）。共鳴動作（co-action）と呼ばれるこの初期の行動が、のちの行動のシンクロニーにどのようにつながっているのかについては、実際のデータに基づいて検討しなければならない（立元，1993）。しかしながらこういった行動が、学習をすることなく生得的に認められることは、シンクロニーと呼ばれる行動が生得的な素地をもったもので、かつ生体にとって重要な意味をもっていることを示唆していると言えよう。多田（1978）は、「無意識のうちに他人の身振り、しぐさを真似ることで社会人となり、一文化の構成員となる」と述べているが、そのための下地となるものが人間には生まれつき備わっていると考えられる。「人は学習によって人間になる」と言うときの学習は、他者とのコミュニケーションにその多くを負っている。他者とのコミュニケーションに、シンクロニーは必要不可欠なものである。

プロクセミックス（近接学）を提唱し、個人空間の文化差などの見解で名を知られている Hall（1976）も、シンクロニーやリズムに関して次のような点に言及している。すなわち、日常生活におけるリズムには呼吸・脈拍・脳波だけでなく、1日・1ヶ月・季節・1年といったリズムがあり、その他にも空腹のリズム・性のリズム・新陳代謝のリズムなどもあり、それらを通常すべてシンクロニーさせていること、またシンクロニーの有無が物事のうまくいっているかどうかの指針となり、シンクロニーの度合いが低かったり欠落していたりすることがイライラを引き起こすこと、などである。例えば、工場での流れ作業は非常に非人間的なものであると思われるが、彼によればその欠点は、シンクロニーがしにくいことにあるという。また、いわゆるダンスは、人と人が相互作用をしているときの行動のシンクロニーを様式化したものであるとも、Hallは主張している。

このHallの見解のもとになっているのが、Condon & Ogston（1966）やCondon & Sander（1974）などの interactional synchrony の研究である。Condonらによれば、2人の人間が話をしている時の行動のシンクロニーは1/24秒のフィルムのコマ単位においても明確に見い出されるという。例えば相手の発話の音節のそれぞれに呼応して、頭や指が動いたり、まばたきしたりするといった具合である（図1）。彼らはそれを interactional synchrony と呼んだ。この interactional synchrony は新生児に話しかけたときにも認められ、「正常の人の間に常に見られる現象であり、誕生時からはっきりと見られ

る人間のコミュニケーションの基本的かつ普遍の特徴である」と、彼らは主張している。Kendon (1970) も同様の分析を行い、interactional synchrony が発話を媒介していること、またそれが常に見られるものではなく、それぞれの発話の初めと終わりによく見られることなどを主張した。

そのような時間的に微視的なレベルでのシンクロニーは、常識ではそこまでの微細なことが起きているとは想像しにくいものであり、エポック・メイキングなものであったと思われる。しかし McDowall (1978) は、フィルムのコマ分析では、どのコマから動作が始まっていたり終わっていたりするのかが特定することが難しく、分析者によって必ずしも一致しないことを指摘している。そして3コマを分析単位として McDowall が行った分析では、偶然水準を上回るシンクロニーは、ほとんど認められなかった。筆者自身も同様の分析を試みたことがあるが、動作の始まりと終わりのコマを特定することは確かに困難であり、そのような分析が不可能に近いことを実感した。また赤ちゃんに話しか

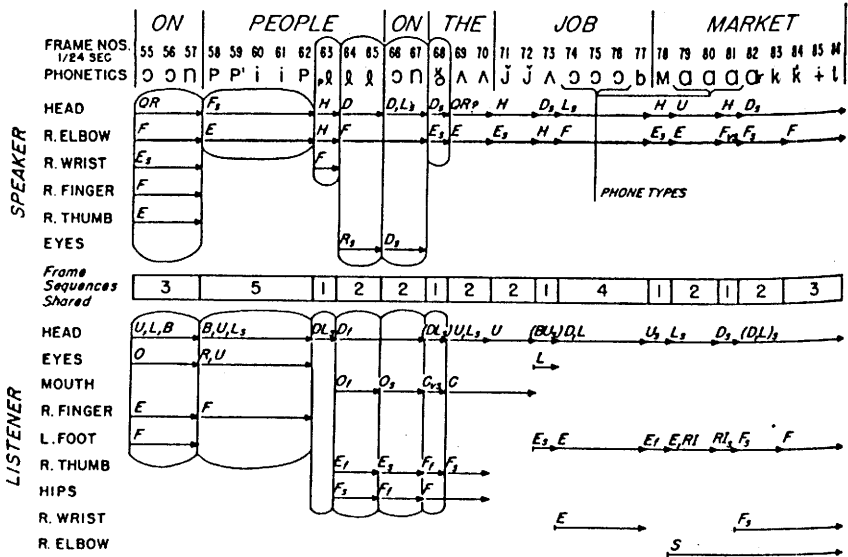


図1 2者の対面コミュニケーション場面における interactional synchrony の例  
話し手の発話(…on people on the job market…)の各音節に合わせて話し手も聞き手も身体の各部位の動きが同期していることが示されている。  
1コマは1/24秒。動作の持続を表わす矢印の添え字は、例えば「D=下へ」など、動きの種類を表わしている。(Condon & Sander(1974)より引用)

けた時の様子を注意深く観たこともあるが、とても Condon らが示したような動きをしているとは思われなかった。Condon らの研究は、しばしば無批判のまま引用されることがあるが（例えば、山口・藤永，1991），筆者はその現象そのものをもう少しきちんと見直す必要があると考えている。どうも interactional synchrony に関しては、「英語で書かれていてエポック・メイキングな話題」というだけで鵜呑みにされ引用されているという懸念を捨てることができない。

個人間の行動のシンクロニーというものは、interactional synchrony として描かれたもののように時間的に微細なところまで同期しているような厳密なものではなく、小林・石井・高橋・渡辺・加藤・多田（1983）が描いているような多少のタイムラグを伴うものではないだろうか。例えば「自分が姿勢を正した直後に相手も姿勢を正した」「コーヒーカップを手にしたら相手も同じようにしていた」といった経験は、日常生活の中で誰にでもあるものであろう。それらは、1秒以下の時間単位のレベルでシンクロニーしているようなものではない。個人間の行動のシンクロニーは、時間的に微細な分析をした結果わかるというようなものではなく、リアルタイムで実感できるレベルのものであると思われる。このことを映像として確認するためには、Condon らがやったような遅回しではなく、早回しで映像を見てみるのがよい。例えば2人の対面コミュニケーション場面なら、いかに2人の身体がダンスのように動いているかがわかるであろう。筆者が出したデータ（伊藤，1991b：図2）によれば、個人間の行動の継起は、1～3秒のタイムラグを伴いがちなものである。したがって、1秒以下の時間単位のレベルではなく、1～3秒ぐらいの時間単位のレベルでシンクロニーを問題にする方が、我々の日常での経験を反映したものになるだろう。

シンクロニー・エンタテインメント・リズムについては、哲学的な議論も呼んでいる。例えば哲学者の中村（1991）は「汎リズム論」を唱え、人間のリズムから物理的なリズム・宇宙のリズムに至るまで、さまざまな事象をリズムというキーワードで捉えている。そのように考えていくことは、世界をどのように捉えるかという哲学の根本問題につながるものと思われ、たいへん興味深い。しかしながら、例えば「電波望遠鏡で捉えた〈天球の音楽〉は、あたかも胎児が聞く母親の体内音と実によく似ている」（中村，1991）などと言われても、にわかにはその関連を承服しがたい。また Leonard（1978）のようにリズムな

どについての言及が神秘的なものにまで至ってしまうようになると、実際にデータをとってそれに語らしめようと試みている筆者にとっては、もはや参考の範囲外という感じになってしまう。

シンクロニー・エントレインメント・リズムなどをキーワードに行動を分析することは、コミュニケーションの中でも“符号のやりとり”の部分ではなく、“場の共有”に焦点を当てることにつながるはずである。しかしながら、これらをキーワードとしているこれまでの研究では、“場の共有”という枠組みが明確に意識されていなかったものが多いように思われる。例えば成瀬（1982）は、臨床場面の経験から、相手と同じパターンの動作をすることが相手の気持ちを理解するために役立っていることを、次のように解釈している。すなわち、相手と同じパターンの動作をすること（それが動きまでには至らない筋緊張の場合でも）で特定の体験が得られ、それによって他者の心の動きを自分の心の中にも再現させることができるという。この解釈は一面では正しいかもしれないし、それなりに魅力的なものに聞こえる。しかし、身体の動きが生み出す符

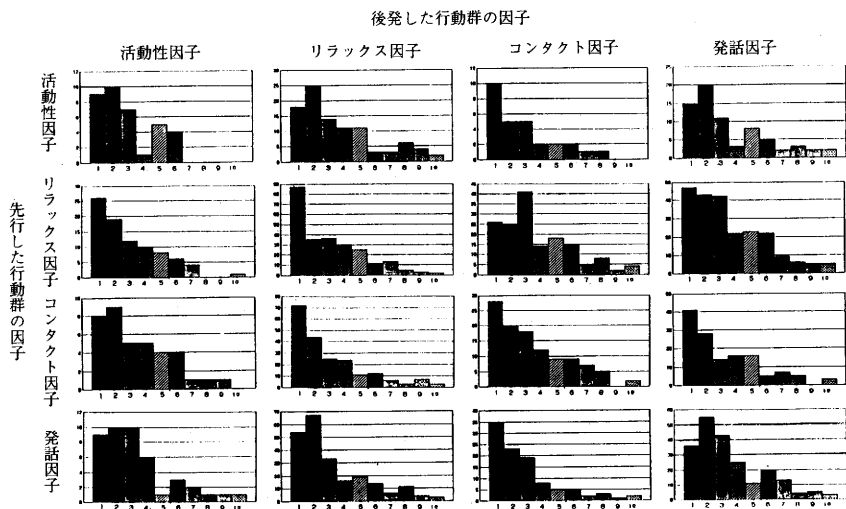


図2 2者の対面コミュニケーション場面における個人間の、各時間間隔（1～10秒）ごとの行動継起頻度。「活動性因子」は“前傾姿勢”“胴体の動き”“両腕の動き”を、「リラックス因子」は“笑い”“うなずき”を、「コンタクト因子」は“視線”“横向き”を、「発話因子」は“発話”“後傾姿勢”を示している。

（伊藤(1991b)より引用 詳しくは拙論参照）

号が一方から一方に伝わるのだという“符号のやりとり”的で言語中心的な見方に捕われているという点は、やはり否定できない。シンクロニー・エントレインメント・リズムなどをキーワードにする際には、“場の共有”ということや、行動と行動との関連に意味が派生するという点が、明確に意識されていないなければならない。

### 対面コミュニケーションをどう捉えるか

以上の論考をもとに、対面コミュニケーションをどう捉えるかについて、あらためて筆者なりの考えをまとめて提示してみたい（図3）。

対面コミュニケーションには、“符号のやりとり”と“場の共有”の両側面があると考える。前者が言語的な側面であり、後者が非言語的な側面である。その2側面は、明確な境界がある二分法的なものではなく、ひとつの軸を成していると考えられる。そして対面コミュニケーションにおける行動のチャンネルのそれぞれは、その軸上にある程度の幅をもって位置している。

例えば“言葉”は最も言語的であるが、言葉がときとしてもつ微妙なニュアンスや言葉が生み出す文脈などを考慮すれば、非言語的な性質を帯びることもあることがわかる。“表情”は、言葉の代弁をするものもあれば、その場の雰囲気を決めているものもあるだろう。したがって、言語的-非言語的の軸のかなりの幅を占めていると考える。“身振り・手振り”には実に多種多様なものがあるので、ひとからげに考えることは難しいが、あえてくくってしまえば、やはり表情と同様に言語的なものから非言語的なものまでとも言えよう。

“準言語”とは、いわゆる話し方のことであり、発話に付随するものであるから言語的な側面を持ち合わせているはずだが、“表情”や“身振り・手振り”ほど明確に言語的な働きはなしえない。また、非言語的な役割も“表情”“身振り・手振り”に比べれば弱いと思われる。“姿勢”については、以上のものよりいっそう非言語的な方向に位置づけられる。そして最も非言語的な極に偏っているのが、相手とどの程度空間的な距離をとるのかあるいは相手と触れ合うのかどうかといった“空間行動・接触行動”であり、個人のもつ行動の“リズム”であると考えられる。

言語的なものの性質は、前にも少し述べたように、明示的・意識的・中心的であり、さらに言えば、直接的・理性的・個別的・S-R（刺激-反応）的・非メタ的・デジタル的であるとも言えよう。その逆に非言語的なものの性質は、

暗示的・無意識的・周辺のであり、間接的・感情的・関係的・非S-R的・メタ的・アナログ的である。視野に例えれば、前者が中心視であり、後者が周辺視であるが、コミュニケーションをしている当事者の注意しているところが、ふいに“周辺視”に移ることもある。

言語的-非言語的の軸は図3では上下に描かれているが、言語的なものが上位で非言語的なものが下位であるということではもちろんない。ただし行動の

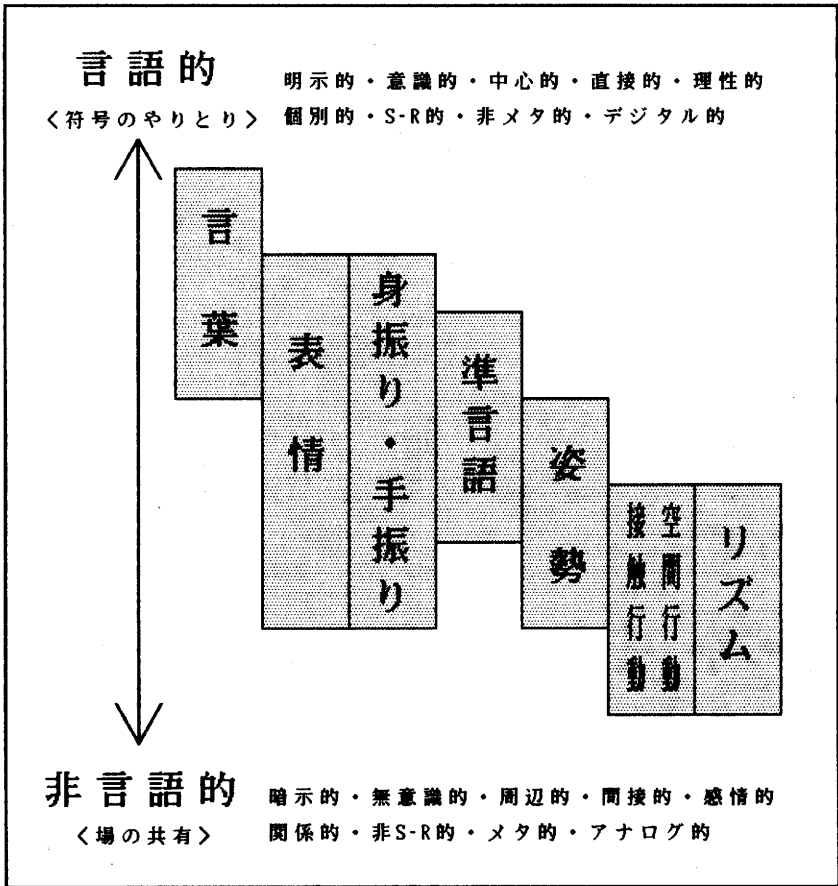


図3 対面コミュニケーションにおける言語的-非言語的の軸と各行動チャンネルの位置づけ

個体発生あるいは系統発生ということ考えたときには、下に描かれている非言語的なものが発生の段階で先行し、言語的なものが後に現われてくるという大ざっぱな傾向は認められるだろう。人間の系統発生では言語的なものが発達しても非言語的なものが衰退しなかったことが興味深いこととして語られることがあるが、それは両者の担っている役割が異なるのであるから、何も驚くに値することではない。言語的なものはあくまで言語的であり、非言語的な役割は担えないのである。

これまでの多くのコミュニケーションの研究では、“バーバル行動”と“ノンバーバル行動”というもとより無理のある二分法で把握しようとし、しかも“ノンバーバル行動”を言語的な枠組みで理解しようとしていたために、必然的に無理が生じていたようである。またリズムといった非常に非言語的なものに着目していても、その非言語的な性質を意識していなかったり、むりやり言語的な性質を当てはめて理解しようと試みていたと考えられる。

最も非言語的なものがコミュニケーションにおいてどのような機能を担っているのかを、ここで少し考えておきたい。山口（1990）は、身体的なコミュニケーションを媒介として情動的なコミュニケーションが表現されるという考えから、そこに動作の同調や情動的な共感という現象が生じると考えている。先述の成瀬（1982）の見解でも—成瀬の記述は“符号やりとり”的な見方に捕われているくらいはあるが—相手の動作をまねることが相手の心の動きを感じとるために働いていると考えられていた。このような論考や日常での経験を参考に考えてみると、個人が持っている行動のリズムは、それが相手のそれとどのようにかみ合うか、あるいはかみ合わないかという点で、言葉では表現しがたい情動的なものを共有したり共有しなかったりすることに働いているのではないだろうか。日本語の「馬が合う／馬が合わない」という言い方や、あるいは「フィーリングが合う／フィーリングが合わない」という言い方に、非言語的なものは大いに関わっていると思われる。もちろん「合う／合わない」という「1／0」的なものではなく、程度の問題であることは言うまでもない。

空間行動や接触行動も同様に、ポジティブあるいはネガティブな情動の共有の程度に大いにかかわっているだろう。これらは行動のリズムよりも文化的な規定が大きいと思われるが、コミュニケーションをしている互いが適当と思う対人距離はその人たちの間柄によってかなり明確に決まっているし、接触が許される間柄でも許容される被接触の身体部位には社会的なルールがある。空

間行動と接触行動は、互いが適当と思っている情動の共有の程度を反映し、またその共有に役立っていると考えられる。これらの行動は、適当の程度からどちらの方向に逸脱しても不快さをもたらすものである。このようにリズムや空間行動・接触行動といった非言語的なものは、情動的なものの共有というコミュニケーションの“土台”を形成していると考えられるのである。

ところで図3は、対面でのコミュニケーションだけでなく、様々なメディアを媒介とした個人間のコミュニケーションを考える上でも参考になると思われる。例えば電話でのコミュニケーションを考えてみると、表情・身振り・手振り・姿勢・空間行動・接触行動はそっくりそのまま抜け落ち、リズムも互いの発話によって生み出される部分に限定される。全体としては、非言語的な部分が手薄となり、言語的な部分に偏りがおきる。それでもなお我々が、大した不自由もなく電話で会話が行えるのは、お互いが非言語的な部分を無意識のうちに想像し補っているからではないだろうか。しかし、電話でなかなか終わるきっかけがつかめず、思わずズルズルと長電話になってしまうことがあるのは、やはり非言語的な部分が手薄であることと関連しているのであろう。また、あまり流暢に話せない外国語で、電話を介して会話をするのが難しいのも、これに関連があると考えられる。

より言語的の極の方が濃厚になるコミュニケーションには、文字だけでやりとりをする手紙やパソコン通信がある。そこでは、非言語的な部分がほとんどないだけに、メッセージの意図が強調され過ぎてしまったり歪曲されてしまったり、非言語的な部分が誤って補われてしまうことが、ときどき起こっているようである。とくにパソコン通信では、言葉だけのやりとりのために非常にサラリとしたやりとりがなされているかというところでもなく、逆に非常に泥臭いやりとりがなされているのであり、ケンカが発生することも珍しくないのである。パソコン通信では括弧などを組み合わせて作った文字顔と呼ばれる“表情”(図4)が文章に挿入されることがしばしばである(細馬, 1993)が、それは非言語的な部分をメッセージの発信者が少しでも補おうとする努力に他ならないものである。

逆に、言語的な部分が手薄となり、非言語的な部分が濃厚になるコミュニケーションにはどのようなものがあるだろうか。例えば、共通して理解できる言語を持っていない者同士の対面でのコミュニケーションが、それに相当するだろう。そのような場合は、身振り・手振りをフルに活用し、相手の表情などに大



いに注意を傾けることになる。確かに込み入った話をするには非常に不便な状況になるが、それでもそれなりのコミュニケーションが成立するのは、海外へ出かけたりしたときに多くの人が経験するものである。なまじ少しだけ言葉が解りあえるよりも、むしろ全く言葉が通じない方が、気楽にコミュニケーションを楽しむことができるという場合もある。言語的な直接のメッセージは、正確な理解をすることが要求されるが、そのやりとりをしなくてすむことが、この気楽さの原因となっていると思われる。しかしその気楽さを楽しむにはある程度の慣れが必要であるらしく、海外へ行く前に言葉が通じないことに不安を感じる人は少なくないようである。

言語的なものから非言語的なものまですべて使える対面コミュニケーションでも、コミュニケーションの相手によっては、どうにもいい感じで事が進まないこともある。先に、リズムのかみ合うかどうか「馬が合う／合わない」などと関連しているのではないかと述べた。が、コミュニケーションの不全は、あるいは言語的なところに問題がある場合もあるだろう。相手とうまくコミュニケーションが取れない場合に、言語的-非言語的のどのあたりに問題がある

(^_^)	ニコニコ	/(^^;	エへへ
(^_^;)	テレルなあ	(@_@)	ギョギョ
(^.^)	ウフフ	(^o^)	キャ!
\(^_^)/	ウレシイ!	(;_;	エーンエーン
v(^^;)	ヤッタね!	(...;	ボクシラナイ...

バスは来ないし雨は降るして、そりゃーもうほんとうに悲惨な状況だったんですよ(;\_;)。でもそのうちに雲が切れて青空が見えてきて……

\\\\\\(^\_^)//// ヲシ!

ツイてるとはこのことですね。そこに彼が現われたんですよ。v(^^;) ヲッ!

図4 パソコン通信における文字顔の例とその使用例

のかを考えてみることは、その解決への手だてとして有効なのではないだろうか。一方の人が何らかの知的障害を持っているような場合にも、コミュニケーションがうまくいかないことが考えられるが、その場合も言語的・非言語的のどこかで、あるいは全体にわたって不全を生じていると考えられる。その不全な部分を明らかにできれば、そのことをコミュニケーションのトレーニングに役立てることができるかもしれない。

本論の初めのあたりでも触れたように、図3のモデルは以上のように、対面コミュニケーションそのものを考えようとする研究にとってだけでなく、例えば何らかのメディアを介したコミュニケーションや臨床場面でのコミュニケーションの理解などの研究にとっても有益であると思われる。このモデルはもちろん検討とリファインの余地があるものであるが、大枠ではコミュニケーションをどう捉えるかという課題に資するものと考えている。

#### 対面のコミュニケーション研究の今後

筆者のいちばん最近の拙論 (Ito, 準備中) では、上述のモデルを意識しながら、6人の被験者による総当たり15ペアの2者の対面コミュニケーション場面を対象に、個人がもつリズムの分析を行った。そこでは発話・(相手への)視線・うなずきの3種の行動が個人内で継起しやすいという知見 (伊藤, 1991b) から、それらが個人のリズムを形成している主要な行動であると仮定し、それらの行動のオンセットの時間間隔ごとの頻度を行動テンポ、相手の行動を基準にした行動のバリエーションの比率を行動パターンと考え、その両者を総称してリズムと呼んだ。そして個人ごとの行動テンポと行動パターンのプロフィールを描き、2者間の行動テンポのずれの程度は実験での相手とのコミュニケーションにおける感情 (場依存的な感情) と、行動パターンのずれの程度は日常場面一般での相手とのコミュニケーションにおける感情 (場独立的な感情) と相関があることを示した。さらに相手とどのくらい行動テンポを合わせることができるのかという点とは、社会的技能 (social skills) の個人特性と相関があることも示した。

この拙論の研究は、コミュニケーションの最も非言語的な部分を分析にのせ、それらを定量的に捉え、かつ心理的な指標との関連を示したという点で意義があると考えている。コミュニケーション研究でこのような点についての論考はこれまで見てきたように少なくないが、実際に分析を行いデータを出している

ものは、interactional synchronyの研究を除いてほとんどないのである(Eckereman, Davis, & Didow, 1989)。しかしながら筆者も、Ito (準備中)の研究以前までは、本論で示した言語的-非言語的というモデルを明確に意識していたわけではなかった。「我々の行動は時空間的に相手の行動と関連しあっているが、空間的な関連性の問題はパーソナル・スペースの問題としてしばしば取り上げられるにも関わらず、時間的な関連性の問題はなぜ注目されないのか」という点が気になって分析を進めてきたところ、リズムということに突き当たることになり、あらためて対面コミュニケーションの全体像を考えてみるに、本論のモデルが浮かんできたというのが、これまでの経緯である。いま「行動は時空間的に相手の行動と関連しあっている」と述べたが、図3のモデルでもっとも非言語的なところに位置しているリズムと空間行動・接触行動が、それぞれ時間的関連性および空間的関連性の問題の対象となっていることは、興味深いと言えよう。

人間の行動を説明するのにレビンが提示した有名な $B = f(P, E)$  ( $B$ : 行動,  $P$ : 認知などの内的状態,  $E$ : 心理学的環境)という有名な公式がある。行動はその人の認知とその人にとっての環境によって決まるという考えである。春木(1993)はそれに対し、Bandura(1978)の相互決定主義(reciprocal determinism)を紹介しながら、 $P = f(B)$ や $E = f(B)$ という式、すなわち行動することで認知が変化したり環境が変化することもありうると述べている。そして $B = f(P)$ や $B = f(E)$ という前提に立った行動の構造を考える研究はさかんになされてきたが、 $P = f(B)$ や $E = f(B)$ という前提に立つ行動の機能を考える研究は乏しいという。言われてみれば確かに、後者の側面は、我々が日常生活の中でいくらかでも経験をしていることである。本論で論じてきた“場の共有”という側面を考えることは、前者だけでなく後者も考慮することに相当する。さらには $P = f(E)$ や $E = f(P)$ ということも念頭に置くべきだと考える。

本論で示したモデル図は、今後のコミュニケーション研究に大いに役立つものと考えているが、しかしながらこれは、対面コミュニケーションの諸相を、時間を止めて切りとって見せたものにすぎない。つまりこれからだけでは、時間の流れを含めたコミュニケーションのダイナミズムは見えてこない。藤岡(1983)は北村論文(1983)へのコメントの中で、北村が「笑い合う」ことと「一方だけが笑う」ことの対比において「笑い合う」という「できごと」の成

立・不成立ということで論で終わってしまっていることを指摘している。そして「例えば、二人が会話を交わしているとき、一方だけが笑っている場合の具合のわるさについて述べるからには、徴候的なものは、できごとの成立、不成立という点のほかに、できごとの成立後の維持、できごとを終わらせるきっかけ、より大きいできごとへの発展をうながすことの共感、できごとの展開の予想の共有、といった、さまざまな相互作用を論じうるはずである」と述べている。同様の批判は、筆者の拙論 (Ito, 準備中) でも甘受せねばならないだろう。拙論では、2者のコミュニケーション場面のある5分間だけを切りとって分析してみせており、会話の進行を追っての変化や、あるいは対人関係の進み具合とリズムとの関連などについては、触れていないからである。

また本論で「行動間の関連性」ということに何度も言及したが、どのような行動とどのような行動が関連するかということが問われなければならない。この関連には、社会的なルールがあるはずである。例えば相手の真剣な話にふざけた笑いを返せば、通常はルール違反と見なされる。関連すべき行動の内容には文化的な規定もあり、話は単純ではない。こういったことを考えることによって、対面コミュニケーション研究の今後の課題が、自ずと明らかになってくる。

本論をまとめることによって、筆者なりに、対面コミュニケーションをそもそもどのように捉えるのかという研究の“基礎”を持つことができたと考えている。2者の対面コミュニケーション場面を、筆者が今後も長く観察・分析対象としていくかどうかは定かではないが、コミュニケーションの問題は人間を考えると避けては通れない問題であり、これからも筆者の研究のキーワードになっていくだろうと感じている。

## 引用文献

- Bandura, A. 1978 The self system in reciprocal determinism.  
*American Psychologist*, **33**, 344-358.
- Brosnahan, L. 1985 *Japanese and English Gesture: Contrastive Nonverbal Communication*. (岡田 妙・斎藤紀代子訳 1988 しぐさの比較文化 —ジェスチャーの日英比較— 大修館書店)
- Bull, P. 1983 *Body Movement and Interpersonal Communication*.  
 (高橋超編訳 1986 しぐさの社会心理学 北大路書房)
- Condon, W. S., & Ogston, W. D. 1966 Sound film analysis of normal and

- pathological behavior patterns. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **143**, 338-347.
- Condon. W. S., & Sander, L. 1974 Synchrony demonstrated between movements of the neonate and adult speech. *Child Development*, **45**, 456-462.
- Darwin, C. 1872 *The Expression of the Emotions in Man and Animals*. D. Appleton and Company.
- Davis, M. 1979 The state of the art : past and present trends in body movement research. In A. Wolfgang (Ed.), *Nonverbal Behavior: Applications and Cultural Implications*. New York : Academic Press. Pp. 55-66.
- Eckereman, C. O., Davis, C. C., & Didow, S.M. 1989 Toddlers' emerging ways of achieving social coordinations with a peer. *Child Development*, **60**, 440-453.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. 1967 The repertorie of nonverbal behavior : categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, **1**, 49-98.
- 藤岡喜愛 1983 北村論文 (1983) へのコメント 季刊人類学, **14**, 27-28.
- Hall, E. T. 1976 *Beyond Culture*. New York : Doubleday (岩田慶治・谷泰訳 1979 文化を超えて TBSブリタニカ)
- 春木 豊 1993 社会行動とノンバーバル行動 異常行動研究会編 ノンバーバル行動の実験的研究 -ダーウィンからアーガイルまで- 川島書店 Pp. 3-21.
- 細馬宏通 1993 当世文字顔事情 -パソコン通信でのさまざまな使われ方- 科学朝日, Oct. 1993, 120-122.
- 入谷敏男 1968 ことばの生態 -情報時代のコミュニケーション- 日本放送出版協会
- 伊藤哲司 1987 共調動作および姿勢反響に関する実験的研究 名古屋大学文学部卒業論文 (未公刊)
- 伊藤哲司 1989 対人場面におけるノンバーバル行動について -実験室観察法を用いたのアプローチ- 名古屋大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊)
- 伊藤哲司 1991 a ノンバーバル行動の基本的な表出次元の検討 実験社会心理学研究, **31**, 1-12.
- 伊藤哲司 1991 b 対人相互作用場面におけるユニットのノンバーバル行動の特性 実験社会心理学研究, **31**, 85-93.
- Ito, T. (準備中) Analysis of individual "rhythm" in face-to-face inter-

- action. *Japanese Psychological Research*.
- 金山宣夫 1983 世界20ヶ国ノンバーバル事典 研究社出版
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 1993 電子ネットワークの社会心理  
—コンピュータ・コミュニケーションへのパスポート— 誠信書房
- 北村光二 1983 対面的相互作用におけるコミュニケーション —「笑い合う」ことと  
「一方だけが笑う」こととの対比を手がかりに— 季刊人類学, **14**, 3-27.
- Knapp, M. L. 1972 *Nonverbal Communication in Human Interaction*.  
Holt, Rinehart & Winston. (牧野成一・牧野泰子訳 1979 人間関係における非  
言語情報伝達 東海大学出版会)
- 小林 登・石井威望・高橋悦二郎・渡辺富夫・加藤忠明・多田 裕 1983 周生期の母  
子間コミュニケーションにおけるエンタテインメントとその母子相互作用としての意  
義 周産期医学, **13**, 1883-1896.
- 熊谷明泰 1992 世界のボディ・ランゲージ 月刊言語, **21**, 37-52.
- Leonard, D. 1978 *The Silent Pulse*. (スワミ=プレム=プラブダ・芹沢高志・  
芹沢真理子訳 1980 サイレント・パルス —宇宙の根源リズムへの旅— 工作舎)
- McDowall, J. J. 1978 Interactional synchrony: A reappraisal. *Journal  
of Personality & Social Psychology*, **36**, 963-975.
- 中村雄二郎 1991 共振する世界 青土社
- 成瀬悟策 1982 動作を通じての相手の理解 サイコロジー, **31**.
- 野村雅一 1983 しぐさの世界 —身体表現の民族学— 日本放送出版協会
- 野村雅一 1992 表現する身体 月刊言語, **21**, 30-36.
- 野村庄吾 1980 乳幼児の世界 —こころの発達— 岩波書店
- 齋藤洋典 1992 縄張りと表情 —記号としての身体— 月刊言語, **21**, 67-73.
- 立元 真 1993 乳児における視覚共鳴反応の発達 心理学研究, **64**, 173-180.
- 多田道太郎 1978 しぐさの日本文化 角川書店
- 山口真美 1990 情動的なコミュニケーションにおける比較行動学的アプローチ —身  
体的なコミュニケーションの研究を中心に— お茶の水女子大学人間文化研究科人間  
文化研究年報, **14**, 231-241.
- 山口真美・藤永 保 1991 関係としてのコミュニケーション研究 —エンタテインメ  
ントとコミュニケーション— *Human Developmental Research*, **7**, 199-209.